

◎報告

看護部活動報告

三朝分院看護部

—看護部報告—

看護部総会において決定した目標「看護をみつまなおそう」に基づき、教育業務各委員の計画に沿って活動した。

1. 教育

〔院内研修〕

(抄読会)

看護記録の改善をめざし「POSの導入と実際：内田郷子編」をテキストに、月1～2回の学習会をもった。並行して、現在の看護記録一号紙の改善を検討中である。

(個人研究)

個人又は、グループでテーマをもち、63年2月と3月に、院内研究発表会をもった。

①カーデックスの効果的利用

吉尾慶子、石湯和子、能見真由美、西谷由紀子
現在の看護記録は、経過記録とカーデックスとを使用しているが、二重記載が多い点と利用頻度の低い欄について検討を行った。カーデックスの様式を一部変更し、記入の方法を統一して使用してみた。結果、今までより記入しやすい事と、看護上の問題点が記載され、それに対するの援助項目が明記される様になった。他施設の見学、セミナー、学習会等で研修した結果として、今後の課題は、経過記録、カーデックス、その他の看護婦に必要な情報等が一見できる形式の看護記録方法の検討である。

②術後疼痛へのペインスコア導入

山本貞枝、賀須井捷子、高田信江

阪本恵子(産業医科大学医療技術短大)提唱の四段階ペインスコアを利用して、術後0～2日の疼痛を客観的に把握し、患者の自覚する0～①の

レベルに保つように看護する、というテーマで、術後患者12例を対象として行った。看護記録で評価した結果、痛みの程度を客観的に把握し、患者の自覚する0～①に保つことが出来る。鎮痛剤を効果的に使用できる、使いやすい等について有効であった。一部、看護婦患者ともに理解不足、看護記録方法等に問題があり、使いこなせていない点があった。その改善と、他の疼痛ある疾患にも使用する方法的検討が今後の課題である。引き続き、ペインスコアを利用して、痛みに対してきめ細かい看護を実施してゆきたい。

③運動療法の指導の目安

西村伸子、山上桂子、尾崎信子、坂田句子、黒田昭子、池田昭子、細田つる子、坂本香須美
運動療法の指示をうけ、個別的に具体的な指導をするための目安として、当院の施設を利用して、歩行による消費カロリーを測定した。(Kenzカロリーカウンターを使用)。コース別、速度、年令、身長、体重、歩数と消費カロリーの関係をみた。廊下歩行、登坂訓練施設、各散歩コースを組み合わせることで、指示された運動療法の目安を得ることができる。又、消費カロリーを数値で見ることが、運動療法への興味、摂取カロリー減少努力等の動機付けとなっている結果も得た。

運動療法への意欲保持、その継続、摂取カロリーの減少努力等について、患者への側面からの援助を続けるためにも、利用したい。

歩数により、消費カロリーを求めたが、万歩計の使用法に検討の余地があるので、今後の課題とする。

④ADL評価表の活用

田熊正栄、森次喜代子、石田美枝子、藤井洋子、福井由美、吉田佐智江、江間美津子、藤井純子
脳卒中ADL表を、昨年に引き続き検討し、記

入しやすい表に改良した。経過を追って、ADLチェックを細く行うことで、患者とのコミュニケーションも深まり、患者のリハビリへの意欲向上もみる事が出来た。単なるチェックに終らず、援助すべき項目、その経過、退院時指導計画等に生かす必要性を痛感した。今後は、精神活動面の情報収集の方法を検討したい。

⑤腰痛患者へのアプローチ

前田恵子、伊賀真由美

腰痛体操を日常生活の中で継続して行うための指導の方法を得る目的で、対象18名、20日間の腰痛体操を観察した。結果、5日目位に中断者が多い、一定の時刻を定めなくても継続している、実施後は快く感じている。苦痛を感じていても、継続により減少している等を得た。入院中に習慣づけ、効果を実感することが有効と考え、「腰痛日誌」の記入と、退院時指導のポイントを提案する。

⑥POSをとり入れるにあたっての一考察

中村寿美江

POSは医療従事者全員でかかわることに意義があるが、看護過程の展開についてPONRで記録した一症例について、その現状と問題点を検討した。初期計画と修正、カンファレンスの方法、記録方法、受持看護婦の対応等に問題点がある。初期計画の立案、カンファレンスのもち方の工夫、PONRで記録する努力等々、暗中模索の実践の中から、少しずつPOSを確立してゆきたい。

⑦退院時要約検討報告Ⅱ

稲垣喜久子

60年度退院時要約検討報告後、種々の改善努力をした。61年度退院時要約を検討し前年度と比較した。看護経過記述、退院時指導、家族への対応、予測される問題点の把握等は前年度より改善されている。

経過の要約、看護上の問題の把握、予測される問題点への具体策等については、改善がみられない。看護の評価については記述されているが、適切な評価は少ない。要約未完のものは、前年度より減少している。一週間以内に作成されているものが最も多い。

看護サイドだけの問題ではないが、入院カルテ

の不備（特に記入もれ）は前年度と同様であり、改善の傾向もみられない。点検システムが必要と考える。今後の課題は、退院時要約の目的の再確認である。看護上の問題点の把握、目標の明確な設定が必須である。

以上のうち

②術後疼痛へのペインスコア導入

③運動療法の指導の目安

を、3月18日、県看護協会研究発表会で発表した。

（講演会）

「病院の基本方針」	谷崎教授	5月
「膵炎と膵癌」	原田教授	7月
「消化器疾患と飲泉」	原田教授	9月
「最近の外科的治療」	古元教授	12月
「妊婦水泳」	奥田助教授	3月

それぞれの分野で、ご指導を頂いた。

（看護助手研修）

「看護補助業務」「HB、感染症のとり扱い」

「人間関係」「環境整備と健康管理」について、各婦長が担当し学習した。

（看護を考える会）

看護をみつめなおそう、をテーマにして行った。第一回、基準看護をふまえて、参加22名 県協会看護婦職能集会でとりあげられた「基準看護について、何を考えるべきか」を中心に、症状に応じた適切な看護を、看護職員が責任をもって行うこと、社会が求めているもの等について、意見交換をした。

日常の業務の繁雑さに、心を見失ってしまわない様に、又、技術面でも患者に安心を与えることが出来る様、研鑽することを確認し合った。

第二回、患者受持制をどう考えるか、参加26名 現在の受持制の状況のアンケートを中心に、患者とのコミュニケーションのもち方、主治医との情報交換、看護婦の受持制に対する認識等、様々な問題が上った。色々な条件の下で、当院に適した患者受持制の検討が今後の課題となった。

（院外研修）

県看護協会研修会、日本看護学会成人分科会、

中四国看護研究学会, その他研究団体のセミナー (POS, 看護過程, コンピューター等) に出席研修した。

必要なものは, 伝達講習をし, その他のものは, 研修報告を回覧した。

例年行われる日本アレルギー協会中国支部主催の「喘息児童夏期教室」(勝山) に参加協力した。

〔その他〕

患者同志及び医療従事者とのコミュニケーションを深め, 少しでも心地よい入院生活を送れる様にとの目的で, 患者教室を開催した。

喘息: リウマチ: 糖尿病教室を, それぞれ二週に一回一時間程度もっている。

医師による指導ばかりでなく, 薬剤師, 栄養士, 理療士, 看護婦の話もあり, 患者からの質問, 体験, 失敗談もあり, 試食会もありで, 終始, などやかな雰囲気が進められ, 厳しい闘病生活のやすらぎのひとつとなっている。学習内容, 参加者数は下記の通りである。

「喘息教室」 延参加者数 344 名

喘息とは, 分類, 検査, 薬物療法, 温泉療法, 看護, 予防, 日誌の記入等について。

「糖尿病教室」延参加者数 252 名

糖尿病とは, 食事療法, 運動療法, 検査, 薬物療法, 実際の食事等について。

「リウマチ教室」延参加者数 299 名

治療, 薬, 自助具, 装具, 包帯の巻き方, 温熱療法, 保温, 入浴, 食事等について。

職員の方々の, いろいろなご協力感謝している。

2. 業務

「効果的な申し送りをする」という目標で時間の短縮と質の向上をめざして, 活動した。

現状把握のために, 申し送りに要した時間を測定し, 個々と, 全体的な傾向をみた。同時に, 申し送りの実際をテープに録音し, 再生記録して自己評価を行った。

改善策として, 全体申し送りの手順と, 各患者の状況に合わせた申し送りの基準を作成し, それに沿って, 試行中である。4月に再度, 同方法で, 改善状況を把握し評価を行う予定である。

看護単位の大きさ, 混合病棟, 長年の習慣, 個人の癖等, 様々な条件はあるが, なるべく早く目標を達成したい。

試行錯誤連続の日々ではあったが, 各々の立場で, 看護部全員が, 目標に向かって, 看護を, 自己をみつめなおし, 少しでもよい看護を提供するよう努力と研修を重ねた事を報告する。

(稲垣喜久子 記)